

『東方』二九七号より

日本における

梁啓超研究の精華

湯志鈞（上海社会科学院歴史研究所）

田邊章秀訳（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

日本の島田虔次教授訳注の『梁啓超年譜長編』五大冊が、今年（二〇〇四年）岩波書店より相次いで出版された。

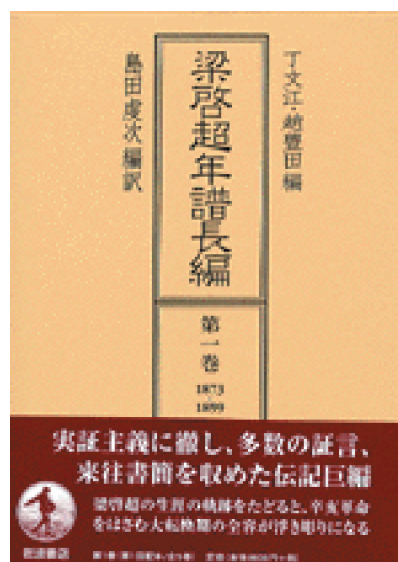
一九二九年梁啓超が逝去した後、梁の親族と友人たちはこの大きな影響力を持った歴史的人物を記念するため、『飲冰室合集』と『年譜』の編集を決定し、「丁文江と梁思成が自ら各地に手紙を出して、梁啓超と師友との往復書簡、および詩・詞・文・電報などの抄件（書き写し）」あるいは複製品を収集した。僅か半年前後の間に、梁家には大量の資料が蓄えられることとなり、梁自身の書簡だけでも二千余通に達したし、その他の各種資料もなお続々と寄せられて来た^①。『年譜』は丁文江の主導の下、一九三二年の夏期休暇中に、趙豊田を助手として初稿が出た。一九三六年一月、丁文江は逝去した。翁文灝が丁文江の遺志を受け、題して『梁任公先生年譜長編初稿』と名づけ五十部を油印（謄写印刷）し（以下「油印本」と略す）、毎部十二冊に装订して梁の親族や知人に送って意見を求めた。現在上海図書館にはこの油印本が所蔵されており、それには陳叔通の評語がある。

一九五八年台湾の世界書局は歴史語言研究所所蔵の初稿油印本を底本に、書名も丁文江撰『梁任公先生年譜長編初稿』とし、巻頭には実に十五ページにも及ぶ胡適の序言を

トップページにもどる

丁文江・趙豊田編／島田虔次編訳
『梁啓超年譜長編』（全五巻）

A5判・平均五二五頁・岩波書店・第一～四巻各九、〇三〇円／第五巻九、四五〇円



配して印刷出版した（以下「台湾本」と略す）。台湾本にはこの序文の手稿が写真版で載せられている。序文では次のように述べられている。「梁任公先生の年譜は在君先生（丁文江）が北京大学で教授として勤めていた時期に編纂を開始したものである。在君先生自身が主編者となり、青年学者であった趙豊田先生を助手とし、数年かけて収集した資料の整理編集を手伝わせた。……在君先生死後、友人の翁詠霓（文灝）はまだ最終的な整理修訂がすんでいない初稿の油印本数十部を任公先生の家族や友人に送付し、仔細に検討したうえで評注を加え、しかる後に送り返すよう依頼した。……油印本の底本は中央研究院歴史語言研究所所蔵の初稿本に当たる。この初稿本はもともと地質研究所に所蔵されていたが、後に歴史語言研究所に移された^②。」

一九七九年趙豊田は助手の手伝いを得て年譜を修訂し、上海人民出版社より一九八三年に出版した。題して丁文

- ▼『東方』297号より
一 日本における梁啓超研究の精華
▲ 湯 志鈞（田邊章秀訳）

江、趙豊田編『梁啓超年譜長編』とし(以下「上海本」と略す)、島田虔次教授はこの「上海本」によって訳注を作成した。

梁啓超は一八九八年戊戌政変の後日本に亡命し、一九一二年に日本から帰国した。この期間、オーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国に行ったこともあるが、長期にわたるものではなかった。彼が主編した『清議報』、『新民叢報』、『政論』はすべて日本で出版されたものである。『新小説』は編輯の名義は趙毓林になっているが、実際は梁啓超の主宰にかかり、横浜で出版されたものである。『国風報』は上海で出版されたが、実際の主宰者はやはり梁氏である。彼は「滄江」の筆名で創刊号に「論国風」上、中、下を発表した。梁啓超はまた東京で高等大同学校を創立し、神戸では同文学校を開校し、たびたび講演を行った。このようであったから、日本にはかならず梁氏の詩文、講演、書簡が残されており、その中には『飲冰室合集』に収録されていない佚篇や新しい課題を提供してくれるような資料も少なくない。

日本の京都大学人文科学研究所はこの点に鑑み、一九九三年から一九九七年まで四年にわたり梁啓超研究班を組織し、多くの論文を発表した。「それと並行して、島田虔次先生を中心とする有志グループにより『梁啓超年譜長編』の翻訳が進められたのである^③」。

『梁啓超年譜長編』日本語訳は「上海本」を底本としている。「台湾本」を参照して疑問があれば校訂を加えている。また様々な手段を講じ、北京の古書店から購入した油印本もつかって校訂を加えた。購入された油印本は完全なものではなかったが(訳注1)、彼らは真摯にこの作業を進め、その一字一句ゆるがせにしない態度は人をして感服せしめ

▶ トップページにもどる

るものである。

『梁啓超年譜長編』日本語訳の称賛されるところは、この書が最新のもつとも信用の置ける材料を引用して訳注を施した点である。例えば「油印本」は梁啓超の子供たちに対し、「世系表」でただ思成、思永、思忠、思達、思礼、思同と息子たちを載せるのみだが、訳注本(の系図)では梁氏の親族である呉荔明女史(思莊の娘)の手による『梁啓超和他的兒女們』を参照して、思順、思莊、思静、思懿、思寧、思均、思広などの娘たちも補充し、さらに注の中で各人の生母や生没年も列記した。訳注はまた年譜中に出てくる人物の本籍、生没年、履歴を記し、さらに「中国人名表」と「外国人名表」をのせて、読者に多大な便宜を与えてくれる。島田先生は漢学に精通し、引用された経史の古籍に対しても注釈を施した。各冊、注の頁数は百余に達し、全体の四分の一近くを占め、多くの力を傾けたことが窺える。

梁啓超が日本に滞在した期間は比較的長かったので、日本にはかならず『飲冰室合集』未収の佚文が残されている。私は日本に滞在中、国会図書館や外務省外交史料館などで未公開の書簡などを探し出し、「日本康、梁遺跡訪問」を書いて『乗桴新獲』に収録した。ただ時間が短かったため見聞には限りがある。『梁啓超年譜長編』日本語訳には私の見えない草稿が載せられており、例えば一八九九年五月二十八日に梁啓超らが神戸中華会館で行った演説など、みな文献的にも価値が高いにもかかわらずあまり知られていなかった資料である。また一八九九年(光緒己亥四月)梁が書いた「日本友人有以北支那山水画冊索題者、為占一絶」

「図に画く 此くの如く好ろしき江山、胡騎 秋深くして自ら往還す。唇齒の興亡は天下の計なれば、君と槩を横たえて楡関を望まん」〔読み下しは第五巻、補注、四三九

頁による」

これは梁が日本の友人瀧川辨三に送ったもので、現在神戸華僑歴史博物館に所蔵されており、訳注本では梁氏の手跡が巻頭写真のなかに収められている。これなどはそれ以前には全く見ることでできなかったものである。

島田虔次先生は日本の京都大学文学部教授、日本学士院会員で、『中国における近代思维の挫折』、『中国の伝統思想』、『朱子学と陽明学』などの著作があり、不幸にして二〇〇〇年三月にこの世を去られた。私は彼とは上海や京都で幾度となく語り合った。彼の逝去後、私は「島田虔次先生を追悼する」という一文を書き、岩井茂樹氏の手になる翻訳が日本の『東方』〔本誌〕二〇〇二年第四、五期に連載された。彼が最後に行った仕事が『梁啓超年譜長編』の訳注である。本書が出てすぐ、狭間直樹教授は京都大学人文科学研究所および岩波書店に委託して寄贈され、かつ第五巻に「正誤表」をつけるため私に読後の意見を求めた。今年六月中旬、本書の編訳に参加された小野和子教授が上海に来て再びこのことを頼まれた〔訳注2〕。いち早く本書を閲読した中国の読者として当然読後感を書くべきであろう。ただ「誤植」について言うならば、これは完全には免れがたいものであり、日本語訳もさきに出版された各本の「誤」を訂正している。このたびの訳注でも魯魚亥豕に類する些細な誤植があるのは免れがたい。またあるものについては疑問にぶつかっても確証を得がたいものもあり、例えば第一巻第三八〇頁一八九八年注(20)で、底本は「鄭雅」、台湾本は「鄭雅□」とするものを、日本訳本は「汪康年師友書札」を参照して、これは鄭孝胥の弟鄭雅(稚)星と考えている。ただ『鄭孝胥日記』光緒二十四年二月十一日(三月三日)の条によれば、「稚星正陽関より来る」とある④。そうであ

トップページにもどる

れば保国会を組織した時点では、鄭稚星は北京にはいなかったことになり〔訳注3〕、「□」が「星」であるか否かは、考慮の余地が残っていないよう。ただ私は年老いて体も弱り、片付けなければならない原稿もたまっているため、仔細に追究することができないが、これはまことに遺憾である。

二〇〇四年十二月十日

【注】

①丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海本、前言、二頁(島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第一巻、岩波書店、二〇〇四年、四頁)。

②丁文江編『梁任公先生年譜長編初稿』世界書局、一九五八年、「胡適之先生序」六〇九頁。

③狭間直樹編『梁啓超・明治日本・西方』社会科学文献出版社、二〇〇一年、「日文本序」八頁(『共同研究梁啓超——西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、一九九九年、序文八頁)。

④中国歴史博物館編『鄭孝胥日記』第二冊、中華書局、一九九三年、六四五頁

〔訳注1〕欠けている部分は、中国社会科学院近代史研究所が提供して下さったコピーで補った。

〔訳注2〕「正誤表」を作るために意見を求めたというよりは、梁啓超研究の大先達、湯先生にいわゆる「批正」をお願いしたのだという。

〔訳注3〕この史料により鄭稚星が保国会開会のころ、北京に居なかったことの可能性を考えたが、保国会の第一回の会合が開かれた日は一カ月以後のことであるから(第一巻、三七八頁参照)、あえて当該人物を鄭稚星に比定

- ▼ 『東方』297号より
四 日本における梁啓超研究の精華
▲ 湯 志鈞(田邊章秀訳)

したのである。
本文中の(一)は著者補記、(二)は訳者補記。なお本稿の
訳注は狭間直樹先生はじめ『梁啓超年譜長編』の訳注を作
成された先生方のご助言による。とを期待してやまない。
研究会の今後に大いに期待を寄せるものである。

[トップページにもどる](#)